
日本村落研究学会 研究通信

(No.260 2021. 2. 10)

JARS (Japanese Association for Rural Studies)
Newsletter (No.260, February 10, 2021)

(事務局) 山下亜紀子(総務担当)・武田里子(会計担当)・松本貴文 (Web 担当)

連絡先：〒819-0395 福岡市西区元岡 744

九州大学大学院 人間環境学研究院 山下亜紀子研究室内

TEL: 092-802-5178 E-Mail: akiko-y8@lit.kyushu-u.ac.jp

郵便振替口座：00150-9-387521 日本村落研究学会

ホームページ・アドレス：<http://rural-studies.jp/>

- | | |
|-----------------------------|---------------------------|
| I. 大会印象記 | II. 総会報告 |
| III. 理事会報告 | IV. 第 68 回(2020 年度)大会終了報告 |
| V. 第 69 回(2021 年度)大会について | VI. 自由報告の募集について |
| VII. 年報「研究動向」の執筆者への業績提供のお願い | |
| VIII. 学会賞推薦のお願い | IX. 地区研究会情報 |
| X. 追悼文 | XI. 院生会員の 2021 年度会費減額について |
| XII. 新入会員の紹介 | |
| 附. 総会資料 (決算報告および予算書) | |
-

I. 大会印象記

2020 年度第 68 回大会は、2020 年 11 月 21 日 (土曜) ～22 日 (日曜) の日程で開催されました。COVID-19 問題を受け、オンライン形式の開催となりました。2 名の会員に大会印象記を執筆していただきました。

1. 稲垣京子 (東京農業大学大学院)

かねてから参加したいと思っていた村研に、第 68 回の今回初めての参加する運びとなった。本印象記の執筆にあたり、これまでの印象記を拝読した。多くはエクスカージョン、地域シンポジウム、会員と寝食を共にする独特の「村研スタイル」について述べられていた。しかし今回はオンライン開催ということで、残念ながらそれらについて執筆することはできない。本印象記では、学会参加で得られた学びとオンラインで良かった点について述べたい。

まず、個別報告およびテーマセッションを通じて、先生方の議論や研究に対する姿勢を学ばせていただいた。筆者は女性農業者に注目した研究を実施していることもあり、特に二つの発表が印象

に残っている。一つ目は、1日目の自由報告Aで発表された佐藤洋子先生の『第5次男女共同参画基本計画案にみる農村女性政策の変化』である。この発表では、男女共同参画基本計画における農山漁村女性政策の整理を通じて、食料・農業・農村基本計画だけでなく男女共同参画基本計画においても、政策基調が人権原理から人材原理へと変化していることを指摘していた。これはつまり女性の個としての自立支援から、生産性の高い人材育成を目指す視点に変化しているということである。佐藤先生は、この変化が性別役割分担意識やワーク・ライフバランスに関する農山漁村女性の課題を置き去りするものであると批判していた。発表後のミーティングルームでは「誰が政策を作るのか」「リアルな声は届いているのか」などの議論が印象に残っている。筆者が研究活動を進める中で、現場のリアルな声を汲み取ることはもちろんであるが、それらを正しく伝えることにもより力を入れていく必要性を痛感した。二つ目は、2日目のテーマセッションで発表された小林みずき先生の『6次産業化を通じた農村の再構築—長野県「農業女子」の事例から—』である。この発表では農業女子世代（若手世代）への聞き取り調査から、従来農村女性として活躍してきた世代と活用する農村資源がどのように異なるのかを丁寧に整理されていた。特に、質疑の中での「農業女子世代は仕事の成果を評価される方が生きやすいと感じている人も多い」という小林先生の発言が印象に残っている。

これらの発表から、農外のキャリアを有する女性の増加や核家族化が進む近年は、人権感覚にも変化があると考えられる。女性自身の変化に沿った政策展開をしているとも見えるが、能力主義の中で世代により農村女性の人権感覚がどのように異なり、誰からどのように尊重されているのかを探求する必要があることを学んだ。先生方の今後の研究成果を追っていくとともに、自身も現場の声を聞きながら農山漁村の女性活躍について考えていきたいと思う。

初参加ながら先生方の有意義なディスカッションを間近でお聞きできたのはオンライン開催の良さであった。特に、個別報告の合間に設けられていたミーティングルームでは、発表に関心を寄せる先生方の熱い議論が拝聴できた。筆者は主に聞き手であったが、昼食を忘れるほど聞き入っていた。また、2日目のジャーナル・セッションの追加議論に気兼ねなく参加できたのもオンライン開催であったからだろう。対面の会議であれば筆者は空気のような存在であっただろうが、名前が確認できるオンライン上では話を振っていただくことができ、村研ジャーナルに対する理解が深まった。さらに先生方とお話の中から、院生やポストク世代のネットワーク形成の場が必要であることを汲み取っていただいた。今後そのような場ができ、全国に点在する熱意ある同世代の研究者と情報交換や活動を共にできることは有難い。

筆者が入会申し込みをした2020年7月は、最初の緊急事態宣言も明けた頃であり、様々なことの判断が難しい時期であった。実際に農村に入ってから地域の調査、対面でのヒアリング調査という研究活動ができそうでできなかつたりしていた。「どうしてこんな時期に博士課程の学生なのか」と複雑な気持ちでいっぱいだった。しかし、他学会で学会の中止が決断される中「研究を止めない」という村研HPのコメントに大変勇気付けられた。このような社会情勢の中、学会を開催してくださった先生方にこの場を借りて感謝申し上げたい。思い通りにならないことも、前例がない取り組みでも、今できる研究活動を精一杯取り組み次に繋げたいと思う。筆者も大会での発表を目指して行きたい。また、エクスカージョンへの参加、先生方や他大学の院生と実際にお会いできることが楽しみである。

2. 坂口奈央（日本学術振興会(国立民族学博物館)）

68 回目となる今回は、初の試みでもある zoom を使用した「顔のみえない」大会となった。今年度は、いずれの学会大会も軒並みオンライン開催となっていることから、11 月下旬に開催された当大会では、ほとんどの会員が、zoom の使い方をおおむね理解した状態での参加であった。参加者数は、1 日目のジャーナルセッション、および 2 日目のテーマセッションで 80 名前後から 90 名ほどとなった。報告者やコーディネーター、質問者以外の顔は、基本的に拝見することができない。パソコンの画面にずらりと並んだ視聴されている方々の名前を拝見し、その方の姿をイメージするのみである。これまで、様々なオンラインシンポジウムを拝聴してきたが、村研大会については、画面に記された名前から諸先輩方の姿を想像したり、報告者や質問者の発言内容について考えていると、意外と孤独感はなく、これも村研独特の空気感がなせる業なのかと感じた。

イレギュラーなオンライン開催ではあったが、当学会が大事にしてきた基盤を再確認する貴重な大会だったのではないかと。本大会 1 日目のジャーナルセッションテーマ「村落研究を問う」、および 2 日目のテーマセッションのテーマは、「日本農村社会の行方」、いずれも、コロナ禍にある今だからこそ、フィールドワークを主とする私たちの研究を根幹から問い直す問題提起が数多くなされた。

「村落研究を問う」セッションでは、芦田裕介会員による村研ジャーナル 1 号から 52 号分に掲載された論文に関する大変緻密な分析が報告された。意見が集中した論点は、村落研究における理論的・方法論的枠組みとしての「イエ・ムラ論」を正面から取り上げる論文や、モノグラフを用いた研究が 2000 年代以降減少していることであった。中でも、「村落」や「地域社会」をテーマにした論文は多いものの、「家族」をテーマにした論文の割合がそれほど高くないという。「限界集落」や「地域活性化」といった社会的課題に対する「大きな問い」の設定によって、現場での現象やそこで暮らす人々の声を丁寧に積み上げていくことに対して、消極的になっていないか、というものである。村研では、実証研究から見出される理論を大切にしてきた学会だけに、これまでの研究蓄積によって改めて村落研究の軸足を再認識させられた。

また、「日本農村社会の行方」をテーマとしたセッションでは、玉野和志氏による「惑星規模の都市化と岐路に立つ農村」と題した報告では、村落内における社会的紐帯に関して、研究者が「ないのにある」「あってほしい」という願望のもとで論じていないか、という重要な問題提起がなされた。タイトルに含まれたような印象的な言葉を用いることで玉野氏は、村落における現実を正面から受け止めた上で、学問と実践はどのような関係にあるのがよいか、問いかけるものであった。

2 日間における様々な議論に共通した重要な論点については、閉会式での佐久間政広会員のコメントが、非常に示唆的であった。佐久間会員は、2 つのテーマセッションを通じて問われていたことは、「私たちの村落研究の行方」ではないかと総括した。村研がこれまで取り扱ってきた、村落で暮らす人々が、生活を維持し生き抜くために編み出してきた様々な仕組みがある。こうした仕組みの枠となる「イエ・ムラ」が、現在どのような仕組みが維持されているのか、またはこれまでの仕組みにどのような変化が表れているのか。私たちは、各自が故郷のように大切にしてきたフィールド

で起きていることに対して、「わかっている」つもりにならず、またコロナ禍による調査の限界に甘んじることなく、研究対象と正面から向き合い、フィルターをかけることなく現象をとらえる当たり前の重要性を教えられた。それは、たとえオンラインという「顔が見えない」学会大会であっても、インフォーマルな場を大切にしてきた村研の経験の積み重ねがあればこそ、各自の深い学びにつながったのではないだろうか。

II. 総会報告

【第 68 回（2020 年度）大会総会】

日時：2020 年 11 月 21 日（土） 17:15～18:15

場所：オンライン開催

秋津元輝会長の挨拶に続き議長に原珠里会員を選出し、以下の議事が報告・審議された。

1. 2020 年度事業報告

(1) 各種委員会報告

1) 研究・年報編集委員会

矢野晋吾研究委員長より、今後の地区研究会についてはオンラインを活用して開催予定であること、第 69 回大会については第 70 回大会にあわせて第 69 回大会のテーマを設定していく予定であることが報告された。

築山秀夫年報編集委員長より、年報第 56 集『集人の移動からみた農山漁村一村落研究の新たな地平』（農文協）』が発刊されたこと、第 56 集の内容と今後の課題について報告された。

2) 村研ジャーナル編集委員会

原山浩介ジャーナル編集委員長より、ジャーナル第 53 号の編集状況と今後の編集方針について報告がなされた。

3) 国際交流委員会

市田知子国際交流委員長より、ARSA について投稿受付中であること、2022 年開催予定の大会（中国広州）が延期になる可能性があること、IRSA 大会は再延期となる可能性があるが確定情報ではないので HP で確認してほしい旨報告があった。

4) 日本村落学会研究奨励賞選考委員会

佐久間政広学会奨励賞選考委員長より、推薦がなかったため本年度は研究奨励賞該当者なしとなったことが報告された。

(2) 事務局報告

山下亜紀子事務局(総務担当)より下記の報告がなされた。

1) 理事会の開催

6 回開催した。大会開催についての臨時理事会（第4回）が含まれる。4月の第3回理事会以降はCovid19の影響で、ウェブ会議となった。

第1回理事会 2019年11月10日（日）茂庭荘会議室（宮城県仙台市）

第2回理事会 2020年1月5日（日）上智大学四谷キャンパス2号館15階 1530b

第3回理事会 2020年4月18日（土）WEB会議

第4回理事会（臨時）2020年6月20日（土）WEB会議

第5回理事会 2020年10月3日（土）WEB会議

第6回理事会 2020年11月14日（土）WEB会議会場

2) 「研究通信」の発行について

下記3号を発行した。

257号（2月25日発行）、258号（7月8日発行）、259号（10月25日発行）

3) 会員動向：2020年11月21日現在の会員数 412名

2020年度新入会員：13名

2020年度退会会員：18名

2020年度逝去会員：1名

2020年度会員種別変更：3名（海外在住会員：2名 特別会員：1名）

4) Covid19問題に伴う会費減免措置について

2020年度は院生会員について全額免除とした。（6月20日第4回理事会決定。メール、通信にて周知）。2021年度は院生会費を2000円に減額することとした。（11月14日第6回理事会決定。総会、メール、通信にて周知予定）

5) 「第25期日本学術会議新規会員任命拒否に対する声明」について

2020年10月9日、学会ウェブサイトにて、「第25期日本学術会議新規会員任命拒否に対する声明」を理事会名にて発出した。また日本学術会議第25期推薦会員任命拒否の問題に関して、人文・社会科学系学協会が2020年11月6日に共同声明を発出し、本学会も理事会として共同声明に参加した。

2. 2020年度大会実行委員会報告

矢野晋吾研究委員長から、コロナウィルスの関係で明治大学の利用が困難となったこと、臨時理事会において明治大学での開催については中止を決定したこと、プロジェクトチームを編成しオンライン開催の準備を行ったことが報告された。また本大会参加者は登録者数で130名であったことが報告された。

3. 2020年度決算報告および監査報告

武田里子事務局（会計担当）より、2020年度の決算について監査の結果とともに説明があり、承

認された（後掲資料参照）。

4. 2020年度事業計画及び予算について

山下亜紀子事務局（総務担当）より、2020年度事業計画が説明された。また武田里子事務局（会計担当）より2021年度の予算計画について提案され、承認された（後掲資料参照）。

5. 2021年度（第69回）大会について

秋津元輝会長から、広島大学の福田恵会員を実行委員長とし、周防大島、岩国での開催を検討していることが報告された。ただしコロナウィルスの影響次第では、東京（明治大学）での開催、オンライン開催という選択肢も設けていることもあわせて報告された。福田恵会員より挨拶があった。

6. その他

山下亜紀子事務局（総務担当）名簿作成にかかわる情報更新のお願いがなされた

Ⅲ. 理事会報告

【2020年度第6回理事会】

日時：2020年11月14日（土）9時～12時

場所：Web会議

出席者：秋津元輝、芦田裕介、市田知子、岩間剛城、北島義和、佐久間政広、高野和良、武田里子、村田周祐、原山浩介、福田恵、松本貴文、矢野晋吾、山下亜紀子

1. 事務局

(1) 会員動向：以下の会員異動について承認された。

入会：1名（井上淳生）。現会員数は412名。

2. 各種委員会報告

(1) 研究・年報編集委員会

1) 研究委員会

大会運営プロジェクトチームとして、2020年度（第68回）大会のオンライン開催に向けて立案した全体の進行計画について情報共有と確認を行った。具体的には、大会運営のスケジュールと人員配置、自由報告・テーマセッションの報告者向けのマニュアルの確認、大会当日朝の周知事項等について最終的な調整を行った。

(矢野晋吾)

2) 年報編集委員会

年報第56集「人の移動からみた農山漁村—村落研究の新たな地平」を発行した。

(築山秀夫)

(2) 村研ジャーナル編集委員会

ジャーナル 53 号の編集の進捗状況について報告した。

(原山浩介)

(3) 国際交流委員会

IRSA 大会が 2022 年に変更されること、ARSA については未確定であることを報告した。

(市田智子)

【2021 年度第 1 回理事会】

日時：2021 年 1 月 11 日（日）10 時～13 時

場所：Web 会議

出席者（五十音順・敬称略） 秋津元輝、芦田裕介、市田知子、岩間剛城、川田美紀、北島義和、桑原考史、佐久間政広、高野和良、武田里子、築山秀夫、西山末真、原山浩介、福田恵、松本貴文、牧野厚史、村田周祐、矢野晋吾、山下亜紀子

1. 事務局

(1) 会員動向

現会員数が 412 名であることを確認した。

(2) 本学会発行の 3 媒体について

今後の方向性について、ワーキンググループを作り、検討することとなった

(3) 院生会費について

院生会員の会費について減額とすることとし、会員会則の変更を次回理事会で検討することとした。

2. 各種委員会報告

(1) 研究・年報編集委員会

1) 研究委員会

2021 年度大会は、2022 年度(第 70 回)大会のテーマも見据え、2020 年度(第 68 回)大会で行われ
レ他「ジャーナルセッション」の成果を踏まえて、検討を行ってきた。2021 年度(第 69 回大会)は、
高野和良会員をコーディネーターとして「『生活』研究の射程(仮題)」を共通テーマとして計画して
いる。

(矢野晋吾)

2) 年報編集委員会

『年報第 56 集』の編集プロセスについて報告した。また『年報第 57 集』の編集状況、執筆者へ
の原稿依頼状況等について報告した。

(築山秀夫)

(2) 村研ジャーナル編集委員会

1) ジャーナル刊行に遅れが発生し、ご迷惑をおかけしました。第 53 号は、年末に発送し、お手元

には年末ないし年明けにお届けできたかと思えます。原稿の集約がそもそも遅れているところに、新型コロナウイルスへの対応で、農文協プロダクションも在宅対応になっていることもあり、印刷が遅れてしまいましたことをお詫び申し上げます。ここ最近、刊行が遅れておりますが、元のペースに戻すため、スケジュール・掲載内容等を調整しております。

2) 論文の投稿が低調です。このコロナ禍は、図書館等へのアクセス、そしてなによりフィールドワークに大きな影響を及ぼしていることが大きく影響していると考えられます。大変な状況ではありますが、会員の皆様には、是非とも積極的な論文の執筆と投稿をお願いしたく思います。

(原山浩介)

(3) 国際交流委員会

世界農村社会学会第10回大会 (XV World Congress of Rural Sociology) の開催は、2022年7月に再延期されました。日程は、大会専用のサイト <https://www.irsa2022.com/congress/> に公開されています。再延期決定後のアブストラクトの締め切りは2021年9月30日とされています。その他の日程も以下に記載します。

2020年6月30日	アブストラクト応募開始
2021年9月30日	アブストラクト応募締め切り
2022年1月10日	報告者 (presenters) への通知
2022年5月28日	報告者 (speakers) 登録締切
2022年6月10日	プログラム確定と配信
2022年7月19日~22日	大会

詳細は、大会専用サイト <https://www.irsa2022.com/congress/>、および世界農村社会学会事務局のサイト <https://www.irsa-world.org/> にて随時、ご確認ください。

(市田知子)

IV. 2020年度大会終了報告

日本村落研究学会第68回(2020年度)大会については、2020年6月20日の臨時理事会での決定を受けて、オンライン形式で実施することとなりました。それ以前まで、市田知子(明治大学) 会員に大会開催に向けたご尽力頂いておりましたことについて、この場で御礼申し上げます。

上記決定を受け、学会では研究委員会を中心とした「大会運営プロジェクトチーム」を結成し、準備を行って参りました。メンバーは研究委員から北島義和・西山末真・川田美紀・村田周祐・高野和良、事務局 Web 担当の松本貴文・前事務局 Web 担当の土居洋平、事務局の山下亜紀子、各会員のご尽力にて、無事、開催にこぎ着けることが出来ました。5カ月間にわたって多大なご尽力を頂いたメンバーの皆様に、改めまして御礼申し上げます。

参加者については、2日間を通じて、134名の会員・非会員に参加頂きました。

会員の皆様のご協力で、無事終了することが出来ましたこと、改めまして感謝申し上げます。

(大会運営プロジェクトチーム・矢野晋吾)

V. 第69回(2021年度)大会について

日本村落研究学会第69回(2021年度)大会の開催日程が決まりました。

日程: 2021年11月5日(金)・11月6日(土)・11月7日(日)

開催方法は、4月理事会(場合によっては6月臨時理事会)で決定することとします。

対面開催の場合、福田恵会員(広島大学)を実行委員長とし、周防大島、岩国での開催を予定しています。

VI. 自由報告の募集について

開催方法が決定した後に、募集を開始します。

VII. 年報「研究動向」の執筆者への業績提供のお願い

各分野の研究動向について下記の会員に執筆していただきます。

[史学・経済史学]

細谷亭(立命館大学)

[社会学・農村社会学]

現在執筆者検討中

[経済学・農業経済学]検討中

現在執筆者検討中

該当期間発表の著書・論文を、2021年3月末までに、研究年報編集委員長までお送り下さるようお願い申し上げます。

築山秀夫 〒380-8525 長野市三輪8-49-7 長野県立大学グローバルマネジメント学部

E-mail: tsukiyama.hideo@u-nagano.ac.jp

(築山秀夫)

VIII. 学会賞推薦のお願い

2021年度「日本村落研究学会研究奨励賞」の推薦をお願いします。推薦の要領、推薦状の様式は以下の通りです。「日本村落研究学会研究奨励賞運用規則」ならびに「同運用細則」をお読みいただき、ご推薦をお願いいたします。

昨年度(2020年度)は、推薦が1件もなく、研究奨励賞の授与をおこなうことができませんでした。若手会員の研究活動を励ますために、多くの会員からの推薦をお待ちしております。

○要領

1. 研究奨励賞は、「単行書部門」と「論文部門」の二部門です。
2. 推薦人は、別記様式の「推薦状」1通を提出してください。

(推薦状の様式は、日本村落研究学会のホームページ <http://rural-studies.jp/> からダウンロードできます)

3. 2021年度研究奨励賞の推薦対象となるのは、「表彰を行う年の3月末日に至る2年間」、すなわち2019年4月から2021年3月までの期間に公刊された研究業績です。
4. 推薦の締め切りは、2021年5月末日です。
5. 推薦状は、以下の学会賞選考委員会委員長あてに送付してください。

〒981-3193 仙台市泉区天神沢 2-1-1 東北学院大学教養学部 佐久間政広

E-mail : sakuma@mail.tohoku-gakuin.ac.jp Tel : 022-773-3708 (佐久間研究室)

○日本村落研究学会研究奨励賞推薦の様式

著書の部・論文の部 (著書・論文のいずれかに○をつけて下さい)

推薦者氏名	所属
研究奨励賞候補者氏名	所属
研究奨励賞候補者	生年月日
学会在籍期間 (入会年月)	
選考対象業績	

○日本村落研究学会研究奨励賞運用規則

1996年10月26日 大会承認

1999年10月16日 大会で改正承認

2011年10月29日 大会で改正承認

2015年11月7日 大会で改正承認

第1条 日本村落研究学会研究奨励賞運用規則は、村落研究に関して優れた研究業績を公刊した本学会員を表彰することについて定める。

第2条 日本村落研究学会賞の名称は、「日本村落研究学会研究奨励賞」(以下「研究奨励賞」という)とし、本学会に2年以上継続して在籍し、実証性・独創性に満ちた研究業績を公刊し、今後の発展が期待される会員を選考の対象とする。

2. 研究奨励賞の授賞は原則として毎年3名程度とする。

3. 授賞対象者のうちアジアなどの途上国を対象とした研究業績に対しては、日本村落研究学会研究奨励賞(北原賞)という名称により授与することができる。

第3条 研究奨励賞を単行書部門と論文部門の二種とする。

2. 単行書部門は、40歳代までを対象とし、論文部門は40歳前後までを対象とする。

第4条 選考の対象とする単行書、論文は会員の推薦を得たものとする。

第5条 第2条の選考対象者は「日本村落研究学会研究奨励賞選考委員会」(以下「選考委員会」と

いう)で候補者を選考し、理事会で決定する。

第6条 理事会に選考委員会を置く。選考委員会は改選後最初に選ばれた理事2名(以下理事選考委員と呼ぶ)と理事以外の会員若干名(以下理事以外の選考委員と呼ぶ)で構成する。

2. 理事会の合議により理事選考委員のうち1名が委員長になる。

3. 理事以外の選考委員は理事選考委員の合議で依頼する。

4. 選考委員の任期は、理事選考委員については2年、理事以外の選考委員については1年とする。

5. 理事以外の選考委員の氏名は当該理事会の任期が終了する時点で開示する。

第7条 表彰は賞状と副賞によるものとし、総会の場で行う。

第8条 本規則の改正は、理事会の議を経た後、総会で承認を得なければならない。

付則 1. 本規則に関する細則は別に定める。

2. 第2条3.の規程は、故北原惇会員の本学会への貢献を記念することを目的とし、同賞の副賞に充当される基金が利用できる期間のみに適用しうる時限的措置とする。

3. 本規則は1996年10月26日より施行する。

○日本村落研究学会研究奨励賞運用規則細則

第1条 本規則は運用規則の円滑な運営を図るために定める。

第2条 選考の対象とする研究業績は、表彰を行う年の3月末日に至る2年間に刊行されたものとする。

2. ただし第1回の選考対象については1993年3月末日に至る2年間に刊行されたものとする。

3. 対象の研究業績は原則として単著とする。ただし、共同研究の業績であっても共著者等の分担執筆は対象に含める。

第3条 選考対象者は、表彰を行う年の3月末日において本学会に2年以上継続して在籍していなければならない。

第4条 本細則の改正は、理事会の承認を得なければならない。

(佐久間 政広)

IX. 地区研究会情報

○関東地区研究会開催案内

日時：2021年3月20(土曜)日 14:00~17:30

会場：Zoom オンライン

参加申込：事前登録が必要です。2021年3月17(水曜)日までに登録をお願い致します(詳細は後述)。

研究会の主旨：本研究会は、フィールド研究における「歴史」とは何か、という点を改めて考えることを目的としている。菅豊会員(民俗学)からは、近著『パブリック・ヒストリー入門 開かれた歴

史学への挑戦』を手がかりに、パブリック・ヒストリーの構想の全体像、フィールド研究における歴史の主体、捉え方などを報告頂き、高田知和会員（社会学）から、特に市町村史や字史の現場を調査してきた経験を踏まえ、歴史を描く主体、その描き方などを含めた報告、大門正克氏からは、歴史学の立場から、俯瞰的視点と現場のミクロな視点の双方の視点から、歴史学が捉えてきた「歴史」と現在の状況を踏まえ、上記報告についてのコメントを頂きます。ふるってご参加下さい。

報告1：菅豊（東京大学）「パブリック・ヒストリーとは何か？」

報告2：高田知和（東京国際大学）「地域社会の歴史は誰が書いてきたのかーアカデミズム史学、郷土史、いわゆる『字誌』ー」

コメント：大門正克（早稲田大学）

※参加にあたって：事前登録が必要です。以下のURLより、事前登録をお願い致します(学会ホームページの「年報と大会・研究会」→「研究会」もご参照下さい)。必要事項をご記入のあと、フォームにある「送信」ボタンをクリックしていただくと登録完了となります。最後の送信をお忘れなきよう、くれぐれもご注意ください。

開催日が近づきましたら、研究委員会よりミーティングルームのURLを通知致します。

なお、当日は、事前登録されている方の氏名を確認の上、会議室への入室を許可致します。必ずZoomの設定で「氏名（所属）」が判るようにしておいてください。

登録URL：

https://us02web.zoom.us/meeting/register/tZUlc0qvrTgpG9FVQg0u0EZ2y_jyC-Fd8gwvy

問合せ先：矢野晋吾（青山学院大学 総合文化政策学部 yano@sccs.aoyama.ac.jp)

X. 追悼文

荒樋 豊さん追想

市田知子

昨年の8月末、荒樋豊さんが逝去された。

荒樋さんと初めてお会いしたのは確か1990年頃である。当時、都心の麹町にあった（社）農村生活総合研究センターに勤務していらした。学生時代から農村社会学を学んでいて、センターでは農村集落、農家の家族や女性について調査研究をされていた。その後、村研や生活学会（日本農村生活学会）など、学会でもたびたびお目にかかり、お話しするようになった。

村研では、創刊から数年経た頃のジャーナル（当時は「村落社会研究」）の編集委員会で一緒にいた。ある日、電話で「編集委員会を手伝ってほしい」というお話をいただいた。私が躊躇しているとすかさず「研究者にとっていいチャンスだから。きっと勉強になるよ」と強く勧められた。ジャーナル編集委員会は、当時から単に採否を決定する場ではなく、投稿された原稿の内容について詳しく議論する場であり、誘っていただいたことを感謝している。

荒樋さんの研究テーマの一つであるグリーン・ツーリズムに関しても、一緒にする機会があった。最も思い出深いのは1990年代の初め、農家民宿に関する農水省の委託調査のため、厳冬期の十勝地

方を訪ねた時のことである。荒樋さんの兄貴分のような存在だった山崎光博さんも一緒に、発足したばかりの「ファームイン研究会」のメンバーである若い経営者の方々のお話を聴き、一泊目は鹿追町の「大草原の小さな家」、二泊目は新得町の「ヨークシャーファーム」に宿泊した。この時の調査に限らず、初めて会った人から話を聴く際にも、荒樋さんの場合、まるで以前からの知り合いであるかのように気さくに打ち解けた雰囲気になるのが不思議であり、凄いと思った。ヨークシャーファームには犬もいて、山崎さんと一緒に雪上で楽しそうに戯れていた光景が今でも目に浮かぶ。

病床の中で編まれたご著書『社会実験としての農村コミュニティづくり—住民・学生・大学教育の3者結合を目指して—』（筑波書房、2020年6月刊）には、秋田県立大学の学生とともに関わられた同県内の地域づくりの活動内容が記されている。地域に生きる人々に対する敬意と愛情に溢れている。思うに、荒樋さんは大所高所からの議論もさることながら、それ以上に、現場で出会った人たちが日々、どのようなことを思い、感じているのかに関心を持ち続けた方であった。合掌。

XI. 院生会員の2021年度会費減額について

Covid19の問題を受け、日本村落研究学会理事会は、院生会員の2021年度会費を減額し、2000円とすることを決定いたしました。

(事務局)

XII. 新入会員の紹介

省略

附. 総会資料（決算報告および予算書）
省略